

2018 年度 教育・研究年報

目 次

教育・研究年報

- 一般教養・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1
- 基礎看護学・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 4
- 成人看護学・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 7
- 老年看護学・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 10
- 母性看護学・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 13
- 小児看護学・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 15
- 精神看護学・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 17
- 地域看護学・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 18

外部資金獲得状況

- 外部資金獲得状況一覧・・・・・・・・・・・・・・・・ 19

2018年度 一般教養領域活動報告

1. 領域構成

清水哲郎（教授）、大井慈郎（特任講師）

2. 一般教養領域における教育に関する内容と評価

2018年度は、清水教授は「探求の基礎」（1学年）、「看護倫理」（2学年、濱中教授、石井講師と共同）、「人間の生と死」（2学年）を担当した。「探求の基礎」は、人間の知的営みの基礎となる見方を学習するものであり、昨年度の授業実践の反省を踏まえて、学生の関心と理解力に合った内容にするように工夫したが、なお改善の余地がある。「看護倫理」も清水担当分について「探求の基礎」との連続性を考慮したが、繰り返すことによる知識と考え方の定着を図る授業展開をさらに工夫したい。「人間の生と死」は、学生の事前・事後の学習を促すことに留意して行った。聞いたこと・読んだことを自分なりに考え、どういう性格の知であるかを併せ理解するように留意しつつ、授業展開をする必要があると分かった。

大井特任講師は「情報処理」を担当した。本科目は、大学生として必要な情報リテラシーの理解やアカデミックスキルなどを学習するものである。本年度は論文の剽窃などへの注意喚起のため、引用・文献リストの作成法について昨年度以上に時間を割いた。

3. 一般教養領域における研究に関する内容と評価

2018年度は、清水教授は科学研究費助成事業 基盤研究(A)（課題番号 15H01861）が最終年度であったため、新たな研究課題に乗り換えて、基盤研究(A)（課題番号 18H03572）を開始し、次のような研究活動を行った。

- ・ 臨床倫理の検討システムおよび本人・家族の意思決定支援の研究開発。ことに、日本におけるACP（アドバンス・ケア・プランニング）の展開を、国際的動向を意識しながら進めていく方途の提言。
- ・ 研究成果を本学の教育カリキュラムに活かす方途の研究開発（倫理関係授業の総合的テキスト作成）。
- ・ 研究成果の臨床現場への還元として、臨床倫理セミナーの開催、医療・看護・介護関係諸団体の臨床倫理研修・ACP相談員養成研修等への協力。日本医師会生命倫理懇談会における意見具申。
- ・ 研究成果の発表として、学会招待講演や公募シンポジウムにおける発表等。

大井特任講師は科学研究費助成事業等の競争的資金を得、また地方公共団体との協働事業参加等により、次のような研究活動を行った。

- ・科学研究費助成事業若手研究(B) (課題番号 17K13838 代表者：大井慈郎) による、インドネシアジャカルタにおける現地調査 (関連してインドネシア大学客員研究員を継続している)。本年度は、現地のプレジデント大学とも協力し、工業団地周辺住民調査を実施。研究成果の一部は、ジャカルタ郊外の労働者に関する学会発表として公表。
- ・科学研究費助成事業 基盤研究(B) (課題番号 16H03319 代表者：内藤耕) による、インドネシアカラワンにおける農村の変容に関する現地調査。
- ・介護予防事業研究 (東北大学教員等と協働) にて、宮城県富谷市保健福祉部長寿福祉課と連携し、各地域にて実施されている高齢者サロンへの訪問調査を実施。
- ・介護予防事業研究 (東北大学教員等と協働) にて、宮城県富谷市総務部市民協働課と連携し、全町内会長に対してアンケート調査を実施。結果を平成 30 年度第 2 回とみやわくわく市民会議にて報告。
- ・盛岡市内にて、町内会の閉じこもり防止活動(主に高齢者対象)に年間を通じた参与観察を実施。

開学 2 年目であり、研究環境もそれなりに整ってきており、着実に研究を進めつつある。清水は本学の 4 年間の教育課程における倫理教育を体系的に整え、本学の教育の理念を具現化する研究を進めており、大井は宮城県富谷市の介護予防事業から盛岡市の高齢者を主な対象とした活動へと活動を広げ、本学の地域貢献につながる可能性をもった研究を行っている。

以下論文等

【論文】

- 1) 会田薫子, 清水哲郎: 高齢者ケアの意思決定プロセスに関するガイドライン — 人工的水分・栄養補給の導入を中心として, 日本臨牀 76 増刊号 5, 2018. p383-387.

【学会発表】

- 1) 清水哲郎: 意思決定支援の臨床倫理 (招待講演), 第 20 回日本医療マネジメント学会学術総会, 2018. 6. 9 札幌市 (ニトリ文化ホール)
- 2) 清水哲郎: 今から最期までの意思決定支援と臨床倫理 (招待シンポジスト), 第 7 回日本精神科医学会学術大会 シンポジウム「精神科疾患のエンドオブライフケアと生命倫理」, 2018. 10. 5 長野市 (ホテルメトロポリタン長野) .

- 3) 清水哲郎：医療・ケアに関する本人の意思と最善の間 ―本人の人生・価値観に基づく意思決定支援―(査読あり), 第30回 日本生命倫理学会年次大会 公募シンポジウム「人生の最終段階における医療とケアの意思決定支援 ―ガイドラインの活用の実際と課題」, 2018.12.9 京都市 (京都府立医科大学)
- 4) OOI, Jiro : The Process of Expanding the Capital Region of Indonesia: Focusing on the Migration Pattern and the Wage Disparity of Employment Workers, The 14th Asia Pacific Sociological Association Conference, October 7, 2018, Seisa University (Refereed)

以上

2018 年度 基礎看護学領域活動報告

1. 領域構成

菊池和子（教授）、竹本由香里（准教授）、作間弘美（助教）、成田真理子（助教）、佐藤恵（助手）

2. 基礎看護学領域における教育に関する内容と評価

開学 2 年目となり、1 年生の科目は昨年度と同様の科目を担当し、今年から 2 年生の科目である療養援助技術論を担当した。看護学概論（菊池教授）、基礎看護援助論（菊池教授、竹本准教授）、看護理論（菊池教授）、ヘルスアセスメント論、生活援助技術論、療養援助技術論、早期体験実習、生活援助実習は、領域内教員が分担・共同して講義・演習、実習を担当した。2 年生前期の科目である看護過程論は領域内教員と他領域教員と共に担当した。通年科目としての基礎ゼミナールは、菊池教授が担当した。

基礎看護学で教授する科目は、看護学の基盤としての役割を担うため、学生のレディネスを把握し、各科目の教授内容について昨年度の授業評価を踏まえて教授した。

早期体験実習および生活援助実習の準備・調整・実施・評価については、基礎看護学領域教員全員が担当し大きな問題なく遂行することができた。特に今年度は、生活援助実習前の準備として、昨年度学生より情報収集と分析についての実習前学習の希望があったことから、冬期休業前 2 週間集中的に事例学習を実施した。

実習指導については、基礎看護学領域教員と、申請内容を踏まえ学内の教員が担当した。来年度は、学年も増えるため、実習と学内での授業が同時に実施されることから、実習担当教員の配置を見直し、計画する予定である。

昨年度課題として、1 年時の前期演習科目の「ヘルスアセスメント論」が形態機能学と並行して教授するため順序性の面で形態機能学の理解がほとんど進んでない段階で、フィジカルアセスメントの理解に時間を要することが挙げられた。今年度も昨年度と同様に前期後半に「ヘルスアセスメント論」を設定し、今年度は事前課題として解剖生理学の課題を課し、少しでも学生の学習効果をあげるようし学生の理解度が若干あがった。完成年度以降、開講時期を形態機能学終了後の 1 年後期に変更する等の改善が必要である。

また、生活援助実習は、冬季でありインフルエンザなどの感染症罹患のリスクが高いため、感染予防対策を徹底するように指導することが必要である。

3. 基礎看護学領域における研究に関する内容と評価

それぞれの教員が学内プロジェクト研究に所属し、共同の研究活動を行い、その成果を全国学会で発表した。学内プロジェクト研究は次年度も継続して研究する予定であり、今後、学会発表及び論文としてまとめ公表する予定である。

昨年度、基礎看護学領域で行った研究を全国学会で発表した。今後、論文にまとめ投稿する予定である。その他、個人研究や他施設教員等との共同研究で取り組んだ研究を看護系学会で発表した。

基礎看護学領域は他領域に比較して、開学から授業や実習に関わる比率が高く、教育に時間を多く要するなかでそれぞれが研究活動を行った。今後は今年度取り組んだ研究を含

め、基礎看護学領域としての共同研究を行うこと、それぞれの教員がこれまでの研究成果を論文としてまとめるために努力していきたい。

以下論文等

【著書】

- 1) 菊池和子：糖尿病療養者の在宅看護過程，正野逸子，本田彰子編：関連図で理解する在宅看護過程第2版，64 - 85，メヂカルフレンド社，2018.

【論文】

- 1) Megumi Sato, Mari Sato, Nobuko Oyamada, and Kineko Sato : Development of a Japanese version of Salmon' s Item List suitable for comparing satisfaction with childbirth experience between different modes of delivery, 日本助産学会誌, 32 卷 2 号, p113-124, 2018.
- 2) 遠藤芳子, 竹本由香里 : 地域に暮らす障害者とその家族の災害発生時における支援ニーズ-近隣の看護系大学への希望に関する基礎調査-, 日本災害看護学会誌, 20(2), 48-55, 2018.
- 3) 日當沙代子, 菊池和子 : 介護老人保健施設における看護師・介護福祉士の看取り体験, 岩手看護学会誌, 12 (2), 15 - 28, 2018.

【学会発表】

- 1) 佐藤恵, 佐々木里絵, 菅原純子, 佐藤ツセ子, 大坂暢子 : 岩手県助産師会 先輩助産師から知と技を教わる研修会「ミサホさんのお産を語る会」開催報告, 第 74 回日本助産師学会, 2018 年 5 月, 金沢市.
- 2) 千葉くみ, 今野貴子, 菊池宏美, 佐藤恵 : A 病院の産後 2 週間健診の現状と課題, 第 27 回母乳育児シンポジウム, 2018 年 8 月, 長崎市.
- 3) 成田真理子, 佐藤恵, 作間弘美, 竹本由香里, 豊嶋三枝子 : 看護中間管理職への部下からのハラスメントの実態 (第 1 報) -職務満足とソーシャルサポートとの関連-, 日本看護研究学会第 44 回学術集会, 2018 年 8 月, 熊本市.
- 4) 佐藤恵, 成田真理子, 作間弘美, 竹本由香里, 豊嶋三枝子 : 看護中間管理職への部下からのハラスメントの実態 (第 2 報) -自由記述からの分析-, 日本看護研究学会第 44 回学術集会, 2018 年 8 月, 熊本市.
- 5) 石井真紀子, 佐藤恵, 成田真理子, 山本勝則, 濱中喜代 : 学生の「ケア・スピリット」の認識と変化 - 1 年次後期看護学実習前後での比較 -, 日本看護学教育学会第 28 回学術集会, 2018 年 8 月, 横浜市.
- 6) 竹本由香里, 大谷良子, 作間弘美, 遠藤芳子, 江守陽子 : 看護学生の職業的アイデンティティと地域志向に関する実態調査, 日本看護学教育学会第 28 回学術集会, 2018 年 8 月, 横浜市.

- 7) 作間弘美, 大谷良子, 成田真理子, 佐藤恵: 重症心身障がい児をもつ母親が交流会に参加するための諸問題とその支援, 第49回日本看護学会 慢性期看護, 2018年9月, 静岡市.
- 8) 今野貴子, 菊池宏美, 佐藤恵: 孫を迎える祖母の育児支援および栄養方法に対する認識, 第59回日本母性衛生学会学術集会, 2018年10月, 新潟市.
- 9) 佐藤恵, 大谷良子: 「出産体験」とされる期間の範囲に関する文献検討, 第33回日本助産学会学術集会, 2019年3月, 福岡市.

以上

2018年度 成人看護学領域活動報告

1. 領域構成

土田幸子（准教授）、石井真紀子（講師）、齋藤史枝（助教）、大崎真（助手）、
添田咲美（助手）

2. 成人看護学領域における教育に関する内容と評価

2018年度に担当した科目は、成人看護学概論、成人看護援助論、生活習慣看護論、早期体験実習、生活援助実習、療養援助実習Ⅰ・療養援助実習Ⅱ、基礎ゼミナール、看護倫理、人間の生涯発達の10科目であった。

1) 専門科目について

(1) 講義・演習について

今年度から2年次の科目（成人看護援助論、生活習慣看護論）が開講された。

2年前期の成人看護援助論では、療養援助実習Ⅰ終了後から紙上事例を用いた看護過程を個人学習とグループワークを交互に組み入れ展開した。グループワークでは個人学習の成果を発表し、看護過程の各要素の理解を深めるように支援した。個人学習が浅い学生は、グループメンバーの学習成果から自分の不足していることに気づくことができ、自己学習の推進につながられた。

2年後期の生活習慣看護論では、生活習慣と疾病の関連を理解し、成人期における人々の疾病予防と生活習慣の改善の重要性について考えることができていた。また、生活習慣病と密接に関連する糖尿病についてセルフマネジメントに関する演習を行った。演習では、フットアセスメント、自己血糖測定、インスリン自己注射を各自で作成した手順をもとに実施した。手順の作成では、根拠が不明確で指導を要した。当日使用する器具については事前に触れる機会があったものの、当日初めて触れる学生が多く、実際の場面では器具の取り扱いに時間を要した。フットアセスメントでは、既修のフィジカルアセスメントの復習をしながら行い、フットケアの必要性を再認識することができた。

今年度の1年後期の成人看護学概論では、人間の生涯発達の「成人期」との重複を避け、生活と健康障害に焦点を当てて構成した。成人期の健康障害をグループワーク中心に展開し、生活や生活習慣と疾病の関連を理解することにつながられ、その後の生活援助実習でも活用することができていた。

齋藤助教が「看護過程論」を担当した。準備の段階から紙上事例の検討に加わり、演習で学生個人やグループの学修支援を行った。石井講師は「看護倫理」を担当し、倫理を学ぶ意義や守秘義務、看護専門職の職業倫理などについて教授した。また、倫理的意思決定の事例検討を展開し、個人学習やグループワークを支援し、発表の機会

を設け成果を共有することで学修を深めた。

(2) 実習科目について

1 年生に対しては、早期体験実習・生活援助実習を領域内の全教員が担当した。

2 年生には対しては、療養援助実習Ⅰ・療養援助実習Ⅱを領域内の全教員が担当した。療養援助実習Ⅰについては、成人看護学領域が科目責任となり実習の準備から最終評価までの一連を担当した。この実習では、看護過程のプロセスを踏むことを目標とした。学生たちは担当教員からの助言を参考に、各過程や実習全体の振り返りにつなげられており、概ね実習目標を達成できたと考える。しかし、実習期間中に看護計画をもとに援助を実施し評価することに至らなかったことを考えると、実習目的と目標の修正が必要と考える。また、実習中の学修態度や実習記録への指導を要する学生があり、今後も継続して注視していく必要性を共有した。

2) 基礎科目について

今年度は、基礎ゼミナールに土田准教授、齋藤助教、添田助手(授業補助)の3名がそれぞれのグループを担当した。PBLの基礎となる文献抄読や文献検索、討議、レポート作成、発表などを通して学生が主体的に学ぶための技術の修得を支援した。これにより学生の探求心が刺激されディスカッションやプレゼンテーション能力の向上につながったと考える。一方で、1グループ10名の学生では、課題学習の自己学習に差があり、共通認識を図ることに時間を要したが、共通理解の重要性と自分たちの不足部分に気づくことができていた。

また、石井講師が「人間の生涯発達」を担当した。成人期の発達の特徴と関連する理論について概説することで、学生にとって成人看護学概論の学修へとつながっていたと考える。

3. 成人看護学領域における研究に関する内容と評価

土田准教授と齋藤助教は「タブレット端末を用いた教育方法に関する研究」チームに所属し、昨年実施した結果から、今年度は学生と教員の双方から検討することとなり、土田准教授は教員側の調査を担当した。教員に対してタブレットに関する研修会の動画撮影と無記名 Web 調査を実施した。その結果、タブレットの使用経験のない教員が多く、授業に使用されている機能は一部に限られていた。今後、操作サポートシステムの整備、複数年での組織的段階的なタブレットを活用した授業デザイン開発にむけた取り組みが必要と考えている。また、齋藤助教は学生側の調査を担当し、昨年の結果との比較検討を行った。これらの成果は、次年度の看護教育学学会で発表予定である。

土田准教授と添田助手は糖尿病患者の継続治療につながる患者教育について文献検討し、その成果を「文献からみた糖尿病患者教育の実態」としてまとめ発表した(10月、岩手県看護研究学会)。これは基礎的なもので、今後はこのデータをもとに治療中断者に焦点をあて、合併症や悪化を予防するための教育のあり方を検討していきたい。

石井講師と添田助手は「ケア・スピリット教育に関する研究」チームに所属し活動して

いる。昨年度末の研究成果を学会（日本看護学教育学会 第 28 回学術集会）で発表している。今年度は 2 年目を迎え、計画に則り 1 年生と 2 年生に対する質問紙調査を実施し学生のケア・スピリットに対する認識を明らかにするとともに学年間の比較、1 年次と 2 年次の経年的な比較を行った。また量的調査では捉えきれない学生のケア・スピリットに対する認識をインタビュー調査で明らかにするために、今年度も 2 年生に実施している。引き続きデータを分析し考察を加え、国内の学会で発表する予定である。

以下論文等

【著書】

- 1) 石井真紀子：大腸がん 看護プロセス，疾患別看護過程セミナー上巻，172-183，サイオ出版，東京．2018

【学会発表】

- 1) 石井真紀子，佐藤恵，成田真理子，山本勝則，濱中喜代：学生の「ケア・スピリット」の認識 —1 年次後期看護学実習前後での比較—，176，日本看護学教育学会第 28 回学術集会，2018 年 8 月，横浜市．
- 2) 添田咲美，土田幸子：文献からみた糖尿病患者教育の実態，46，公益社団法人岩手県看護協会創立 70 周年記念事業看護研究学会，2018 年 10 月，盛岡市．

以上

2018年度 老年看護学領域活動報告

1. 領域構成

勝野とわ子（教授）、木内千晶（准教授）、金谷優輝（助手）

2. 老年看護学領域における教育に関する内容と評価

1. 老年看護学領域科目

「老年看護学概論」は、1年生の後期に開講し、勝野教授が授業を担当した。本科目では、学生の高齢者観・倫理観を深化させるとともに加齢に関連する諸概念と理論を教授した。また、高齢者を身体的・心理的・社会的側面から総合的に理解し、高齢者の健康レベルに合わせた質の高い看護を提供するための基礎知識を教授するとともに、対象者の成長と発達のプロセス、人口統計および社会構造の変化、災害時のニーズ、高齢者への保健・医療・福祉サービスの現状と課題を教授し、老年看護実践における専門的な看護者の役割と機能を概観した。授業内容の工夫点として、心理的な介入方法としてのレミニッセンスプロジェクトを課し、学生の高齢者と看護に対する興味を育んだ。学生の取り組みの姿勢および達成度は高かった。

「老年看護援助論」は、2年前期に開講し、勝野教授、木内准教授が授業を担当した。ヘルスプロモーションの活動プランを演習に取り入れる工夫を行い、金谷助手もこの演習指導に加わった。この科目は、高齢者の生活を支える諸制度および社会資源、ヘルスプロモーションについて理解し、健康生活を支援する基礎的知識を修得する、また、認知症などについて理解を深め高齢者と介護家族に対する看護方法について基礎的能力を修得することを目的とした。学生の取り組みの姿勢および達成度も良好であった。

「老年看護技術論」は、2年後期に開講した演習を含んだ科目で、勝野教授、木内准教授、金谷助手が担当した。高齢者の残存機能を活かした生活援助技術、高齢者に対するヘルスアセスメント技術について、技術演習を通して実践に即した方法が修得できるよう物品を整備し授業展開の工夫を行った。次年度は老年看護援助論とのつながりをさらに考慮し、講義と演習の組み合わせにより効果的な授業と演習を展開する予定である。

2. 看護基礎科目および臨地実習

「基礎ゼミナール」は、1年の通年科目で、勝野教授と金谷助手、木内准教授がそれぞれグループを担当した。学生の科学的思考力を醸成すること、また、活動の中でグループダイナミクスを引き出せるよう学生を支援した。木内准教授はレポートの書き方・提出方法、討議の方法についての一斉講義を担当した。担当グループの取り組みの姿勢および達成度は高かった。

「看護過程論」「人間の生涯発達」は、1年の科目で木内准教授が担当した。「看護過程論」は関連図、看護問題の統合、全体像の描写、看護目標と計画の立案、実施、評価についての講義を担当した。授業の工夫としては、複数の担当教員と授業前から打合せを重ね、具体的な事例展開ができる内容となるようにした。

「人間の生涯発達」は2コマを担当し老年期の発達理論、発達課題について講義した。老年期の発達における身体的、精神的、社会的特徴について諸理論を交えて教授し、生活援助実習で多くの学生が受け持つ高齢患者の理解につながる内容とした。

「療養援助実習Ⅱ」は2年の後期に行われた臨地実習である。実習責任領域として、勝野教授、木内准教授、金谷助手の協力体制のもと8実習病院と連携し、打ち合わせを密に行いながら計画的に事前準備を行った。さらに、担当教員と調整し学生が実習前に看護技術の復習を行える機会を整備した。実習中は勝野教授が全病院の統括として担当教員と密に連絡を取り合うとともに、実習委員会委員長および学部長の指示のもと、スムーズに実習が進行するよう工夫した。引き続き実習の円滑な運営と学生に対する教育の質の向上へ向けて努力が必要である。

1年の「早期体験実習」および「生活援助実習」、2年前期の「療養援助実習Ⅰ」を木内准教授と金谷助手が担当した。それぞれの実習において、臨床指導者との調整を行い、学生が実習目的を達成し、看護実践から学びが得られるよう支援した。

3. 老年看護学領域における研究に関する内容と評価

勝野教授、木内准教授、金谷助手の3人は、学内のプロジェクト研究のメンバーとして、本学におけるタブレット端末利用状況向上に向けた取り組みをテーマに、タブレット端末を活用した授業展開に向けての基礎研究を行った。本年度の活動内容は、本学教員と学生を対象としたタブレット端末（iPad）活用状況に関する調査で、現状を明らかにした。研究成果は2019年度の日本看護教育学会で発表予定である。

勝野教授、木内准教授、金谷助手の3人は、学内共同研究のメンバーとして、積雪寒冷地域における身体活動量、食生活、筋力、骨格筋量の季節変化をテーマに、積雪寒冷地域65歳以上の高齢者を対象に身体活動量、食生活、筋力、骨格筋量を夏季と冬季に調査した。季節変化について分析し、研究成果の発表を計画中である。

以下論文等

【論文】

- 1) 岩瀬和恵, 勝野とわ子. 何が介護老人福祉施設で看取りを可能にするのか—看取りを行う看護師のインタビューから—, 川崎市立看護短期大学紀要, 24 (1), 1-9, 2019.
- 2) Chiaki KINOUCHI, Yuko TAKAYAMA, Mediating Effects of Work Engagement of Nurses Working in Long-Term Care Beds in Japan, Annual international conference proceedings on worldwide nursing, 84-89, 2018.
- 3) Yuko TAKAYAMA, Chiaki KINOUCHI, Factors Related to Burnout of Japanese Male Nurses, Annual international conference proceedings. Annual international conference proceedings on worldwide nursing, 59-66, 2018.

【学会発表】

- 1) 木舟雅子, 遠藤百合子, 小野寺敦志, 宮永和夫, 比留間ちづ子, 勝野とわ子. 全国の若年認知症家族会ならびに支援者団体同士をつないでいこう!! 第19回日本認知症ケア学会, 2018.
- 2) 森優貴乃, 勝野とわ子. 急性期病院における認知機能低下高齢者へ対する看護実践と関連する要因の検討. 第38回日本看護科学学会学術集会, 2018.
- 3) 末永裕代, 勝野とわ子. 日本語版 Tilburg Frailty Indicator の作成と信頼性と妥当性の検討. 第38回日本看護科学学会学術集会, 2018.
- 4) 青山美紀子, 勝野とわ子. 若年認知症に関する研究動向と課題. 第38回日本看護科学学会学術集会, 2018.
- 5) Yamagishi, N. & Katsuno, T. Status of nursing care for elderly patients with type 2 diabetes living alone in Japan. 22nd East Asian Forum of Nursing Scholars, 2019.
- 6) 根岸貴子, 木内千晶, 中澤明美, 認知症の妻をもつ夫の介護初期の介護課題とその克服プロセス, 第19回認知症ケア学会, 2018.
- 7) Chiaki Kinouchi, Yuko Takayama, Mediating Effects of Work Engagement of Nurses Working in Long-Term Care beds in Japan, Worldwide Nursing Conference, 2018.
- 8) Yuko TAKAYAMA, Chiaki KINOUCHI, Shigeko SHIBATA, Naoko SHIOMI, Factors Related to Burnout of Japanese Male Nurses, Worldwide Nursing Conference, 2018
- 9) 甲斐恭子, 齋藤史枝, 木内千晶, 豊嶋三枝子, 医療系大学教育においてタブレット端末を活用している文献の動向, 日本看護学教育学会第28回学術集会, 2018.
- 10) 三浦奈都子, 遠藤良仁, 相澤純, 小松恵, 小坂未来, 木内千晶, 岩手県医療系3大学合同多職種連会シミュレーションプログラムの試み, 第11回岩手看護学会学術集会, 2018.
- 11) 木内千晶, 高山裕子, 小檜山敦子, 療養病床の看護に関する研究の動向と課題, 第38回日本看護科学学会学術集会, 2018.
- 12) 高山裕子, 松尾まき, 木内千晶, 小檜山敦子, 男性看護師のバーンアウト因果モデルの作成と検証, 第38回日本看護科学学会学術集会, 2018.
- 13) Chiaki Kinouchi, Eiko Suzuki, Yuko Takayama, Mika Takano, Hitomi Setoguchi, Saori Nakazawa, Naoko Shiomi, Causal Model of Work Engagement of Registered Nurses and Licensed Practical Nurses with Different Educational Backgrounds, The 17th Annual Hawaii International Conference on Education, 2019.
- 14) Yuko Takayama, Eiko Suzuki, Chiaki Kinouchi, Hitomi Setoguchi, Saori Nakazawa, Naoko Shiomi, Strategies for Preventing Burnout Among Japanese Male Nurses - from a Viewpoint of Mental Health Education in the Workplace, The 17th Annual Hawaii International Conference on Education, 2019.

以上

2018年度 母性看護学領域活動報告書

1. 領域構成

江守陽子（教授）、大谷良子（助教）

2. 母性看護学領域における教育に関する内容と評価

2018年度は、1年次科目の「基礎ゼミナール」（江守・大谷）「早期体験実習」（大谷）「生活援助実習」（大谷）「人間の生涯発達（2コマ）」（江守）、2年次科目の「看護過程論」（大谷）「療養援助実習Ⅱ」（大谷）を担当した。さらに、大学教員として1・2年生の看護専門基礎科目の学修や学生生活を支援した。

母性看護学領域に関する科目としては、母性看護学概論（1単位：前期）、母性看護援助論（2単位：後期）を開講した。また、次年度以降の準備として母性看護学実習室の整備、備品・物品購入、次年度以降開講予定の「母性看護技術論」「セクシャルヘルス・アセスメント」「母性看護学実習」のシラバス、授業・演習・実習の学修内容について検討・準備を進めた。

次年度以降、1～3年生を対象に、母性看護学領域をはじめとする看護専門科目について、興味を持って聞ける、よくわかる授業と臨地での本格的な教育を提供する必要がある。

3. 母性看護学領域における研究に関する内容と評価

江守教授による2019年度科研費の継続研究：「育児期にある女性の社会経済的地位と健康関連QOLおよび育児ストレスとの関係」については、データ収集を終え、分析を進めている。

また、江守と大谷がともに参加する学内プロジェクト研究：「看護学生の職業的アイデンティティと地元志向に関する研究」では、前年度実施した看護学生アンケートの分析とその学会発表、看護職者対象のアンケートの分析とその報告書の作成及び報告書発送を完了し、さらなる研究の継続と進展を目指している。

大谷助教は、佐藤恵助手との学内共同研究：「不妊治療後妊娠した女性の出産体験の受け止め」について研究を開始し、対象者に対するインタビュー調査の実施とその中間報告として、2019年3月、福岡で開催された第33回日本助産学会において口頭発表を行った。

次年度以降は母性看護学担当教員が1名補強されることから、本格的な母性看護学領域としての教育・研究活動を始動させる必要がある。

以下論文等

【学会発表】

- 1) 竹本由香里、大谷良子、作間弘美、遠藤芳子、江守陽子：看護学生の職業的アイデンティティと地域志向に関する実態調査、第28回日本看護学教育学会学術集会、2018. 8. 29 横浜市
- 2) 佐藤恵、大谷良子：「出産体験」とされる期間の範囲に関する文献検討、第33回日本

助産学会学術集会、2019. 3.3 福岡市

- 3) 作間弘美、大谷良子、成田真理子、佐藤恵：心身障がい児を持つ母親が交流会に参加するための諸問題とその支援、第49回日本看護学会－慢性期看護－学術集会、2018. 9.27 静岡市

以上

2018年度 小児看護領域活動報告

1. 領域構成

濱中喜代（教授）、遠藤芳子（教授）、甲斐恭子（助教）

2. 小児看護学領域における教育に関する内容と評価

2018年度も、基礎ゼミをメンバー3人が担当した。1年生の学習状況や到達レベルの確認に役立ったと考える。関連科目として、「人間の生涯発達」の科目を濱中教授が責任者として担当した。小児の発達段階、発達理論、各期の特徴について概説できた。その学びを踏まえて2年次前期の小児看護学概論を展開した。後期には遠藤教授が小児看護援助論を担当した。3年次に向けて、新しい科目の講義及び演習内容を検討した。また予定していた実習場所の小児科医が辞職する事態が起こり、再度実習場所の確保に向けて、病院施設との折衝し、具体的な学習内容についても検討した。次年度に向けての準備が整ったと考える。

3. 小児看護学領域における研究に関する内容と評価

2018年度は、濱中教授が本学、清水哲郎教授代表の科研の分担研究者として、昨年度に引き続き、看護倫理教育に関して情報収集を行った。また西南女学院大学の谷川教授との科研の研究成果を小野氏とともに医療と保育に投稿し掲載された。

遠藤教授は科学研究費助成事業における挑戦的萌芽研究（代表者：遠藤芳子）において、研究をまとめ、学会誌に投稿し掲載された。そして挑戦的萌芽研究の最終年度報告を行った。また、基盤研究（C）（代表者：佐藤幸子（山形大学））では、共同研究者として研究論文を学会誌に投稿し掲載された。もう1編の論文を北日本看護学会誌に投稿中である。

そのほかに、メンバーが本学の3つのプロジェクト研究それぞれ担当し、データ分析等に取り組んでおり、濱中教授は「看護学生のケア・スピリットの認識に関する研究」（石井筆頭）の一部を日本看護学教育学会にて発表した。遠藤教授は、「学生が地域志向性を持つようなアイデンティティ形成のための教育方略に関する研究」（竹本筆頭）の一部を日本看護学教育学会にて発表した。それをまとめた論文を日本看護研究学会誌に投稿する予定であり、研究の他の一部（遠藤筆頭）を第22回北日本看護学会学術集会で発表し、論文として投稿する予定である。さらに研究の一部（大谷筆頭）を第29回日本看護教育学会に演題登録する予定である。甲斐助教は、「タブレット端末を用いた教育方法に関する研究」の一部を日本看護学教育学会第28回学術集會にて発表した。また、タブレット端末に関する研究は継続中で、その後の内容を日本看護教育学会第29回学術集會に演題登録しており、それらをまとめたものを今後投稿する予定である。

総括として今年度は個人の研究活動はあまり推進できなかった。次年度以降は向上的に取り組んでいきたい。

以下論文等

【論文】（全部査読あり）

- 2) 小野鈴奈、谷川弘治、濱中喜代：小児医療の現場で多職種が連携・協働していくために保育士に求められること 医療と保育 17 (1) pp28-40 2019.3
- 3) 遠藤芳子、竹本由香里：地域に暮らす障害者とその家族の災害発生時における支援ニーズー近隣の看護系大学への希望に関する基礎調査ー. 日本災害看護学会誌. 20 (2) pp48-55 2018.12
- 4) 佐藤幸子（山形大学）、塩飽仁（東北大学）、遠藤芳子、今田志保（山形大学）：心身症・神経症児の学校等の仲間集団における対人関係で困難感が高まる場面の検討. 北日本看護学会誌. 21 (2) pp17-24 2019.2

【学会発表】（全部査読あり）

- 1) 石井真紀子、佐藤恵、成田真理子、山本勝則、濱中喜代：学生の「ケア・スピリット」の認識ー1年次後期看護学実習前後での比較 日本看護学教育学会 第28回学術集会講演集 p176、2018 パシフィコ横浜
- 2) 甲斐恭子、齋藤 史枝、木内千晶、豊嶋三枝子：医療系大学教育においてタブレット端末を活用している文献の動向 日本看護学教育学会 第28回学術集会集 p157、2018 パシフィコ横浜
- 3) 竹本由香里、大谷良子、作間弘美、遠藤芳子、江守陽子：看護学生の職業的アイデンティティと地域志向に関する実態調査. 日本看護学教育学会第28回学術集会、 p 156、2018 パシフィコ横浜（神奈川県横浜市）

以上

2018年度 精神看護学領域活動報告書

1. 領域構成

長南幸恵（講師）、佐藤つかさ（助手）

2. 精神看護学領域における教育に関する内容と評価

前期実習科目として、佐藤助手が「早期体験実習」、「療養援助実習Ⅰ」、後期は、長南講師および佐藤助手が「療養援助実習Ⅱ」を担当した。

基礎科目授業として、佐藤助手は、基礎ゼミナールの授業補助を行った。

専門科目授業は、今年度前期は専任助手一名の分野体制だったため、非常勤講師が「精神看護学概論」を行い、精神医療の歴史や法体系を教授して頂いた。

後期は、長南講師が「精神看護援助論」を担当し、佐藤助手は授業補助を行った。講義は、精神看護の原則・姿勢や精神疾患に対する具体的な看護方法を中心に教授し、次年度の精神看護技術論および精神看護学実習へ向けた知識や思考方法のラダー教育を目指した。

3. 精神看護学における研究に関する内容と評価

今年度は、精神看護分野としての研究着手には至っていない。分野の人員刷新に伴う新体制への過渡期であったことが大きな要因である。次年度以降は、分野としての研究着手が課題と考えている。

個人研究活動として、佐藤助手は、本学プロジェクト研究のメンバーとしてデータ収集および分析等に取り組んだ。

長南講師は、日本学術振興会から研究助成を受けている研究課題（K1612158）を継続遂行中である。今年度は、学会誌への論文投稿を行い、学会誌に発表された。次年度は、更なる調査および分析、論文発表等を行い、研究活動を活発化させる予定である。

以下論文等

【論文】

- 1) 長南幸恵：発達性協調運動障害（DCD）が併存していた自閉スペクトラム症（ASD）のある子ども1例の運動感覚特性と行動の実際、精神科治療学、33(9)、1123-1129、2018.

以上

2018年度 地域看護学領域報告書

1. 領域構成

青柳美樹（講師）

2. 地域看護学領域における教育に関する内容と評価

平成 31「年度授業計画を立案した。来年度授業は、前期にヘルスプロモーション論、後期に地域看護学概論、地域看護学援助論が開講される予定である。次年度着任予定の教授と授業展開について連絡を取り合い、平成 32 年度 4 年次に開講される地域看護学領域の科目を含めて展開方法について検討した。

平成 32 年度に実施する「地域看護学実習」「公衆衛生看護学実習」「総合実習」の準備を行った。教育委員会、県内保健所・市町村担当課を訪問し、実習の実施時期や実施内容について調整を始めた。また、県内 3 大学の情報交換会に出席し、次年度の実習配置や実習方法について情報交換を行い、次年度早期に実習調整の必要性について相互確認ができた。

3. 地域看護学領域における研究に関する内容と評価

科学研究費助成事業 基盤研究 (C) 課題番号 16K12314 (代表者：青柳美樹) の研究課題に取り組んだ。今年度は、インドネシアジャカルタにおいて、海外赴任者帯同配偶者のボランティアグループの支援を受けて、渡航後 1 年未満の配偶者に対し、ワールドカフェ方式のワークショップを実施した。

学内共同研究として、老年看護学領域の教員と協働し、岩手県盛岡市在住の高齢者の筋肉量や筋力、食生活と身体活動量の季節変化の検証研究を実施した。次年度は、着任予定の本領域教授・助手を含め、老年看護学領域との共同研究として研究を進める予定である。

学内プロジェクト研究では、「看護学生の地域志向性を高める教育方略の検討ー岩手県内の看護学生と看護職者の職業的アイデンティティと地域志向の実態調査ー」に新メンバーとして参加し、分析に参加した。

【論文】

- 1) 青柳美樹, 山崎 恭子, 島田 直樹, 大屋 晴子. 事業場における女性労働者の子育て支援制度の利用に関連する要因の検討、日本健康学会誌、84(3)95-108, 2018
- 2) 青柳美樹、多賀昌江、高山裕子. 夫の海外赴任に同行する配偶者における渡航前の不安と渡航後の困りごとーWeb 調査における自由記述からー. 日本渡航医学会誌、12(2), 2019

【学会発表】

- 1) 三澤真理子. 青柳美樹. 保健専門職のいない事業場における産業看護職のかかわりの影響の検討ーメンタルヘルス対策としての管理職研修の効果の評価ー. 第 7 回日本産業看護学会 第 7 回学術集. 2018. 11. 3
- 2) 青柳美樹、多賀昌江、高山裕子. 海外派遣労働者帯同配偶者のストレス反応とコミュニティ参加、相談者の推移 2016 年と 2017 年のインターネット調査から. 第 22 回日本渡航医学会学術集会. 2018. 7. 22
- 3) Miki Aoyagi, Masae Taga, Yuko Takayama. Factors Based on Length of Stay Related to Stress Response of Japanese Spouses Accompanying Husbands Posted Overseas. The 33rd Congress of International Communternational Commission on Occupational Health. 2018. 5. 3

以上

外部資金獲得状況

外部資金獲得状況一覧

清水哲郎 (一般教養：教授)

1) 基盤研究(A)(代表)

課題番号：18H03572

研究課題名：臨床倫理システムの哲学的展開と超高齢社会への貢献および医療者養成課程への組み込み

濱中喜代 (小児看護学：教授)

1) 基盤研究(A)(分担)

課題番号：18H03572

研究課題名：臨床倫理システムの哲学的展開と超高齢社会への貢献および医療者養成課程への組み込み

江守陽子 (母性看護学：教授)

1) 基盤研究(C)(代表)

課題番号：17K12284

研究課題名：育児期にある女性の社会経済的地位と健康関連 QOL および育児ストレスとの関係

遠藤芳子 (小児看護学：教授)

1) 基盤研究(C)(分担)

課題番号：16K12134

研究課題名：心身症・神経症児のための動画によるソーシャルスキルトレーニングツールの開発

勝野とわ子 (老年看護学：教授)

1) 基盤研究(C)(代表)

課題番号：15K11474

研究課題名：若年認知症家族介護者の健康支援に関する看護技術開発

2) 基盤研究(C)(分担)

課題番号：15K11821

研究課題名：独居の高齢 2 型糖尿病患者への Person-centred Care モデルの開発

木内千晶（老年看護学：准教授）

1) 若手研究(代表)

課題番号：18K17616

研究課題名：高齢者施設の看護職のワーク・エンゲイジメント因果モデルの検証

大井慈郎（一般教養：特任講師）

1) 若手研究(B)(代表)

課題番号：17K13838

研究課題名：東南アジア都市における工業団地労働者の地域・階層移動研究

2) 基盤研究(B)(分担)

課題番号：16H03319

研究課題名：インドネシアにおける日系工業団地進出と地域社会変容に関する研究

青柳美樹（地域看護学：講師）

1) 基盤研究(C)(代表)

課題番号：16K12314

課題研究名：海外派遣労働者の配偶者における生活適応状況の特徴の明確化とコミュニティ支援の検討

長南幸恵（精神看護学：講師）

1) 基盤研究(C)(代表)

課題番号：16K12158

研究課題名：ASD 児の各感覚の特性と生活の困難さに関する研究

以上